

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾ニュース

人の世に熱あれ 人間に光あれ④ ～悲しみが見えないのでは、教育はできない～



一見無邪気に見える子どもたちの表情の奥にある悲しみが見えないのでは教育はできない

同和教育を「ひとごと」と捉える教師に対して怒りをぶつけた仲間の語りに、生徒K・Kは、私の人生の師である佐藤文彦先生の著書『人間の生き方と同和教育』を引用し、次のように語った。

「昨日、佐藤文彦先生の書いた本を読んでいたら、本の中に『一見無邪気に見える子どもたちの表情の奥にある悲しみが見えないのでは教育はできない』というのがあって、その言葉がすごく心に残りました。やっぱりそういう心の奥まで悲しみが見えなかったら、同和教育はやっていけないんだと思いました。」

部落問題に対する本当のことを学んでいくことが大切なんだと思う

「わがごと」として取り組むことの重要性を知っている生徒たちは、「ひとごと」としてしか取り組めない教師へ疑念を投げかけるばかりか、そうした教師を諭すかのように語り合っていた。

そして、真剣に自分の一番苦しい部分を友だちに語り続けてきた生徒Y・Iは、語り合いをまとめるように、次のように語った。

「この前の授業のときも言ったけど、部落問題の学習に取り組んできたことによって、大人だけでなくいろんな先生の裏側まで見えてきて、先生というのは尊敬するものという気持ちもあるけど、部落差別をしている先生は、自分が教えている生徒まで結局差別していることになるでしょう。」

だから、先生不信みたいな感じになってきたんだけど、よく考えてみたら、私たちは森口先生に出会ってこういう授業をみんなでいっしょにやれたから、ちゃんと差別の本質までわかっているけど、部落問題を「ひとごと」としている先生たちは、自分のおじいさんとかおばあさんとか、親から部落の悪いイメージを吹き込まれたままで何が何だかわからない状態で教師になって、そのイメージをぬぐいさることができない状態にいるんじゃないかと思うんです。

だけどこの部落問題というのは考えてみれば本当におかしいことで、アメリカとかで人種差別とかがあるでしょう。それって見た目で黒人か白人か違いがわかるでしょう。その差別も絶対におかしいんだけど、でも部落差別ってほんまに区切りがあるように見えてないように思うんです。

先生から『ほんまに部落に生まれたかと思っていても、その証拠がどこにも見つからなんだ』という話や、『自分が部落でないかと思っていても、自分が部落でない証拠もどこにも見つからなかった』という話を聞いたことがあるけど、ほんまにそうだと思うんですよ。何かその人の血が違うわけでもないのに、ほんまに自分が部落なんかどうも決定的な確証もなしに、人が勝手に『あの人が部落で、あの人が部落でない』と言って差別していくということはほんまにおかしいことだと思うんです。」

生徒は、真摯に自分と向き合い、語り合い追求していく。中には、部落の友人に対して面と向かって無遠慮に、差別発言をする親と対立する生徒もいる。様々な家庭、地域を生きる子どもたちが「部落とは何か、部落差別とは何か。」を「わがごと」として、それぞれに自分自身を語っていく。本気で自分自身を語り合う姿は美しい。

写真は 1991年11月19日 徳島県中学校同和教育研究大会 (板野中学校3年B組公開授業)

